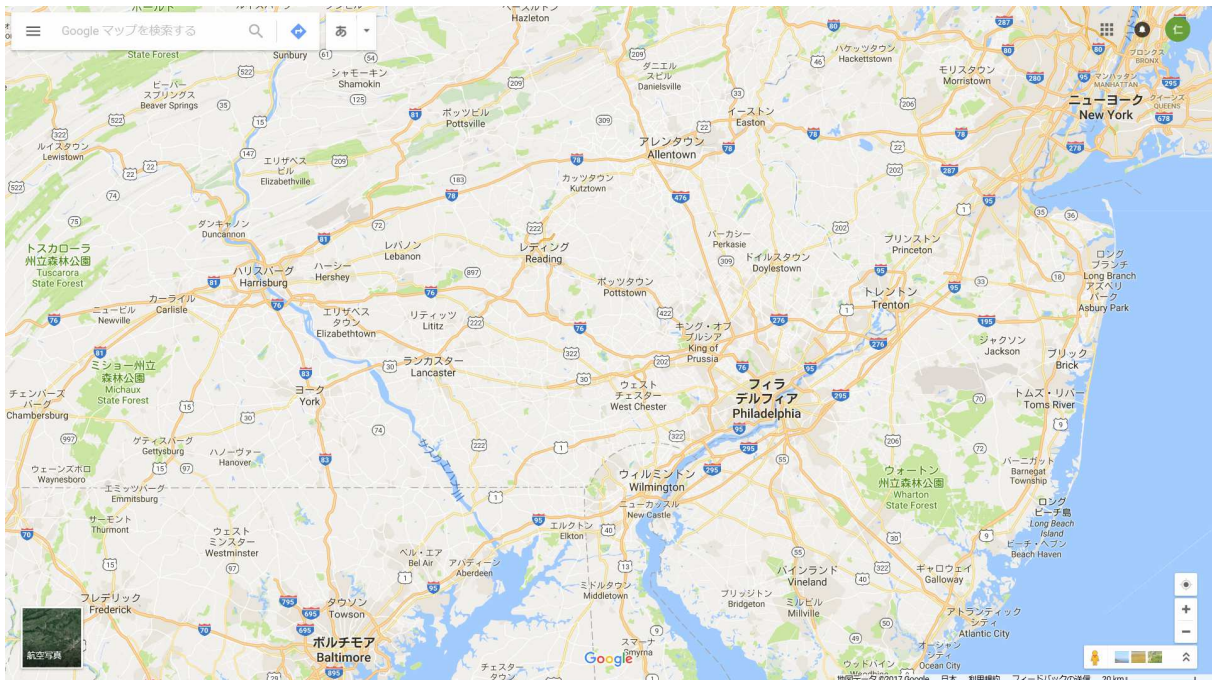


ペンシルヴェニア東部 (Eastern Pennsylvania) アメリカ合衆国



地図 ペンシルヴェニア州東部 右上から州外のニューヨーク、プリンストン、州内のフィラデルフィア、メリーランド州のボルチモア。地図中央から左に、ランカスター、ハリスバーグ、左下にゲティスバーグ。

旅は一冊の地図帳を眺めるところから始まった。それは、私達の基準からするとやや大ざっぱな気がする米国製品の中であって、以前から良質の品と感じていた大手出版社ランド・マクナリー(Rand McNally)社の道路地図帳(Road Atlas)で、今年(91年)の2月、春にアメリカへ行くことが決まった時に、銀座のイエナ書店で買い求めたものだった。私は家に帰って暇を見つけては、この地図帳のニューヨーク(New York)・ニュージャージー(New Jersey)、そしてペンシルヴェニアのページを眺めていた。

プリンストンを起点に

ペンシルヴェニア(以下ペンと略す)は米国東部にあって、面積12万平方キロ、人口1200万の大きな州で、形は東西に長い方形、中央部を北東から南西にアパラチア山脈が走り、地勢は東部の海岸平野と西部の丘陵地に

二分される。東部諸州の中ではほぼ中央に位置し、独立戦争の際にはその地理的条件ゆえ、当時の州都フィラデルフィア(Philadelphia)で植民地側の大陸会議が開かれるなど、枢要の地位を占めてきた。その名もキーストーン(key stone)の別称が与えられている州である。ペン東部には、十年前の旅で行きそびれ、以来訪れてみたかった幾つかの場所があった。今回の旅の目的は、ニュージャージー州のプリンストン(Princeton)に先輩友人のたぐいを訪ねることだったが、そこからペンは目と鼻の先である。私の足は、自然とペン東部の田園地帯に向かうことになった。

3月30日、大学町プリンストンの朝は雪となった。その前数日間、ニューヨークの中心マンハッタンにいたが、異常な温かさの28日を除いていずれも冬日で、摩天楼を見上げれば上階は冬雲に覆われ、寒々とした日が続い



写真1 大学正門(Nassau gate)

ていた。昨日も氷雨の中を車を運転してこの地へ着いたのだが、ついにこの雪である。今日から始まるペン東部へのドライブ旅行が無事に行けるか、少々不安になった。午前中は先輩のアパートにお邪魔して、留学1年半を過ぎたご家族の米国体験を聞いた。途中、子供達は森の中に隠してあるイースターの卵を見つけに出かけたが、この天気の子供達も中止とのことであきらめて帰って来た。昼も過ぎてからそこを退室し、一旦大学のキャンパスに戻って名高い美術館を見学してから、町を出た。もう午後遅くになっていた。

州境のデラウェア(Delaware) 河を越えてインタ・ステート(I S)95号線を南下する頃には雨も上がり、間もなくしてフィラデルフィアの都心部へ降りる道に入った。この大都会は十年前の旅で唯一訪ねたペンの街だ。ビジターセンター(VCと略)で情報を集めた後、独立革命の舞台インディペンデンス・ホールに立ち寄り、辺りをビデオに収めた。日暮れが近付いているので急ぐことにして、今夜の目的地、西方のチャズフォード(Chadds Ford)の村へと向かうことにした。

ワイエス三代の美術館

都心と西部地区を分けるスクルキル(Schuylkill)河を越え、旧国道1号のボルティモ

ア街道を西へ向かう。黒人居住区の次に豊かな白人の住む郊外が展開し、それも過ぎてハイウェイに出る頃には日もとっぷりと暮れ、チャズフォード近くにホテルを探すことになった。

明けて31日のイースター・サンデー。空はすっかり晴れ上がり、チャズフォードで1号線と交差するブランディーワインリヴァー(Brandywine River)の畔に、同名の美術館を訪ねた。ここには、画家アンドリュー＝ワイエス(Andrew Wyeth)のアトリエがある。1世紀前の製粉用の水車小屋を増改築して建てられた美術館の中には、アンドリューとその父 N. C. ワイエス、その息子 J. ワイエスと三代の画家の作品が展示されている。父 N. C. は、今世紀前半『宝島』などの児童書で米国の少年達に夢を与えた著名なさし絵画家である。N. C. の英才教育で育ったアンドリューは、人間の孤独と自然を題材にし、エッグ＝テンペラやドライブッシュ等の独特な技法で精彩に仕上げる画風を造り上げた。そして息子ジェイミーは、ケネディー大統領等を題材に現代的な肖像画で自己のアイデンティティーを確立している。



写真2 ブランディーワインリヴァー美術館

アンドリューは、夏に過ごすメイン(Maine)州の海岸地方とこのペンの野に暮らす隣人達のみを、画材に選んだ。代表作『クリスティ

一ナの世界』(NY近代美術館蔵)も、メインでの妻ベッツィの親友、障害者のクリステイナ=オルソン(Christina Olson)をモデルにしたものだ。チャズフォードでも、農夫カーナーなどを描いて来た。私のお目当ては、86年に15年の沈黙を破って発表された一連の作品『ヘルガ』だったが、残念ながら他で展観中とのことで見られなかった。ヘルガ=テストーフ(Helga Testhof)はこの村での隣人で、金髪につやを残すドイツ系アメリカ人だった。作品はこのブランディーワインの谷に生きづく自然の中にヘルガの裸体や肖像を描いたものだが、リアリズムとある種の神秘性、その両方を兼ねそなえた魅力的なシリーズといえる。

アーミッシュの住む土地へ

川にのぞむ美術館の食堂で簡単な昼食を済ませた後、1号線を離れ、州道41号をランカスター(Lancaster)に向かう。車はペンの酪農地帯を快走する。陽春の光りは、草木を芽吹かせ、沿道のれんぎょうを花開かせている。こののどかな光景は、国道30号線に合流するまで続いた。



写真3 『アーミッシュ・ヴィレッジ』

ランカスター周辺は、いわゆるペンシルヴェニア・ダッチのコミュニティーが散在する

土地である。ダッチ(Dutch)と言ってもオランダ人ではなく、ドイツのライン地方にいたキリスト教新教再洗礼派の人々が、17世紀に信教の自由を求めてこの地に移り、自らをドイツ人(Deutsch)と呼んだのを誤解した人々によりこの名が定着したという。とりわけアーミッシュ(Amish)と呼ばれる人々は、現代文明の多くを拒絶して今なお19世紀の暮らしの中に生きている。彼らに関心のあった私は、早速『アーミッシュ・ヴィレッジ』という観光施設を訪れてみた。

園内にはアーミッシュの農家と、彼ら自身の学校等が保存復元されていた。農家では彼らがまとう黒色のマントやケープ、スラックスやスカートといった色・形を指定された衣服から、ロープで編んだベッド、手縫いのキルト仕様のベッドカバー、階下に降りて調理用ストーヴ、ガス灯(彼らは電気を使わない!)、庭に出て移動の手段である馬車(自動車も使わない!)など、質素で慎ましいその生活用品をガイドについて見て回った。家畜舎への水の供給も川の水車による。馬車を使うので鍛冶屋も不可欠で、蹄鉄などの展示してある小屋もあった。時折り、前の道路面を蹄(ひづめ)が打つ音がして、黒い馬車が通り過ぎ、慌ててカメラを向けたものだ。学校は8年制で、皆一つ屋根の下で、基礎教科と英語及び祖先伝来のドイツ語の方言を学ぶ。質実な生活をそのコミュニティー内で送る彼らにとって、これ以上の学問は無意味なのだ。この制度により、彼らの独特な社会が維持されて来たことが分かる。

スリーマイル島原子力発電所

アーミッシュについて書かれた本でも探そうと、ランカスター市内のV. C. に立ち寄るが、観光情報しか提供しない所で当てが外

れてしまった。時間に余裕がないので、仕方なく次の目的地、サスケハナ(Susquehanna)河の中洲スリーマイル島(TMI)に向かう。30号線が河にぶつかる手前で降り、州道441号線を北上した。10キロ以上も走っただろうか、それまで見えなかったこの大河が左下に見えて来た頃、TMI原子力発電所の看板が目に見え込んで来た。中洲へ渡る橋のもとに車を止め、その在りかを確かめてみた。遠く北方に発電所の冷却塔が望まれた。入口はどこかと思案している時に、下の川縁でマスでも釣っていた親子連れが上って来たので聞いてみた。

2マイル上流とのこと。ついでに12年前の有名な放射能漏れの事故の時、どうしたかと聞いてみた。その父親はこの「遅れてやって来たやじ馬」に幾分不快な顔をして、「何も(Nothing)！」と言って去って行った。

1979年3月28日午前4時、TMI原発2号炉へ冷却水を送るポンプが作動しなくなった。原子炉の温度と圧力が上昇したが、この事態に対して加圧器逃し弁が開き、放射能を帯びた水と蒸気が原子炉から地下の受水槽に流れ出た。温度と圧力が正常に戻った時、その弁は閉じられるべきだった。ところがオペレーターに分からぬままそれは開いたままとなり、2時間以上も原子炉を通り汚染されていた冷却水が放出され、地下の受水槽と補助タンクを一杯にした。冷却水なしに炉内の温度は再び上昇し始め、ついにそれは数千度にも達しウラン燃料の一部が溶け出した。ようやく弁が閉じられた時、オペレーターは水が失われているのに気づき、慌てて冷却水を再導入した。しかし、溶け出したウランと冷却水のあまりの温度差に、燃料棒の一部は粉々に打ち砕かれ、その礫(れき)が

原子炉の底にたまった。こうしてTMI原発は世に知られる名前となった……。

旅の途上で手に入れた、3月29日付けの地元紙『フィラデルフィア・インクワイアラー(Inquirer)』は、以上のように、この事故の発生を回想し、伝えている。実際の事故は、この時に放射性の気体が外部に漏れ出て、発生後3日目に州知事は周辺8キロ以内の学校の閉鎖を命じ、90万人に及ぶ周辺住民の避難計画を発表。さらに、事態を重視したカーター大統領が緊急対策を指示し、住民の一部を避難させる騒ぎとなった。漏れ出た放射線量が希少で人体に影響無しと判断され、この騒ぎが収まったのは、ようやく4月5日になってからだった。あれからちょうど12年の歳月が流れた訳だ。



写真4 TMI原発とサスケハナ河 上流から

車はその原発に近づいて行く。そして、巨大な冷却塔が離れて2基ずつ4基正面に見えてきた。やがて州道がサスケハナ河沿いの丘上に行くようになると、それはもはや私の視野に入らない程の大きさに眼前に迫ってきた。ちょうど閉館のV.C.の前である。85年に再開された右の1号炉の2基は今日も蒸気を上げている。しかし、左の2基は西日を背に受けて無気味な程静まり返っていた。そのすぐ右に位置する2号炉は、「監視保管」という形で1号炉の免許が切れる2014

年まで放置されることになった。現在汚染除去作業中とのことである。さらに1キロ程行った所に入り口を見つけたが、守衛の写真さえとらせてくれない嚴重さだった。TMIの事故は米国の原子力政策の分岐点となった。事故以来、建設・計画中の原発はすべてキャンセルされ、現在まで1基の原子炉さえ新設されていない。それはチェルノブイリ事故への序章とも言えるほど、忌まわしい事件だったのだろう。

ゲティスバーグへ

16キロ上流の現在の州都ハリスバーグ(Harrisburg)は、81年の夏グレイハウンド(Greyhound)のワシントン行き夜行バスで、途中通った街だ。そこでサスケハナ河を渡り、今度は国道15号を南下することになる。今夜の宿は、「15号線沿いの戦い」とも呼ばれた南北戦争の激戦地、ゲティスバーグ(Gettysburg)に取ることにした。時折沿道に、春に目覚めた野生動物の轢(れき)死体が横たわっている。チャズフォードに、これと同じ光景を描いたアンドリューの『追い越し車線(Fast lane)』という絵が掛かっていたことを思い出した。あの絵もこの季節に描いたものだろう。日が沈む前に市中に入り、いかにもアメリカ的な自室に車を横付けられる平屋のモーターに宿をとった。

4月1日朝、早朝の霧が消え去った後、モーターを出て近くのゲティスバーグ国立墓地に向かった。この入り口の前にもV.C.があり、中にはこの激戦の様を伝えるエレクトリック・マップというショー・ホールと、遺品や使われた武器を集めた博物館が設けられていた。1863年7月初めの独立記念日を前にした三日間、北部に侵入した名将リー將軍配下の南軍と、これを迎え撃ったミード將

軍配下の北軍とがこの地を舞台に戦った。国立墓地の地点は北軍の本部があった所だが、9万6千の将兵はその北側に馬蹄形に布陣した。7万5千の南軍将兵はそれを外から囲むように布陣し、戦いの2日目と3日目に、その中央を突破しようと執拗(しつよう)な攻撃を加えた。とりわけ3日目の南軍ピケット將軍配下の1万2千名の将兵が、大砲と小銃の掃射を浴びながらここを攻めて北軍とぶつかったもののついに突破できず、わずか50分間で双方合わせて1万名に上る戦死者を出した戦闘は、戦いの凄まじさを物語るクライマックスだった。



写真5 ゲティスバーグ古戦場

この夥(おびただ)しい犠牲があったからこそ、連邦政府の維持に腐心していた時の大統領リンカンは、「人民の人民による人民のための政府は地上から滅びることはない」と宣言するのを感じたのではと思う。V.C.を出て向かいの国立墓地に入り、リンカンのいわゆる「ゲティスバーグ演説」の場所を訪ねてみた。半円形に縁取られた北軍の英霊が眠る墓所の中心に、その場を示す小さな碑が立っていた。敵陣だった北側になだらかに傾斜する、見晴らしの良い丘の上だった。ここで戦いの4ヶ月後の11月19日、居並ぶ聴衆の前に僅か2分間の演説が、リンカンの口から語られたのである。今日も星条旗がたなびく墓地を後にしてゲティスバーグの街を通り、

再び15号線をハリスバーグ方向に戻ることにした。

ニューホープとジョージ中島

ハリスバーグの東方、チョコレートで有名なハーシー(Hershey)の町にそのテーマ・パークを訪ねた後、国道422号を東へと帰路についた。この道はハイウェイの部分が少なく、交通量も多く、なかなかフィラデルフィアまでたどり着けなかった。ようやく手前のノリスタウン(Norristown)に至り、国道202号を最後の目的地ニューホープ(New Hope)へと向かう頃には、午後もだいぶ遅くなった。

デラウェア河沿いの街ニューホープは、古くから芸術家のコロニーとして知られた町である。日本でも著名な建築家アントニン＝レーモンド(Antonin Ramond)の住まいがあるので、訪ねてみたい場所の一つだった。もっともここへ来る前、ニューヨークのメトロポリタン美術館(M. M. A)の日本ギャラリーでジョージ＝中島(George Nakashima)の木工の造形を見て彼がこの町に住んでいたことを知るまでは、あえて立ち寄ろうとは思っていなかった。この二人の創作の舞台があったからこそ、今回の訪問となった。



写真6 ジョージ・中島 コノイド・チェア

V. C.を探しながら通りを行くと、道はデ

ラウェア河の橋まで来てしまい、やむを得ず手前の交差点を左折してみた。幸い警察の看板があったので、そこで尋ねてみることにした。体格の良い私服の若い警官は、レーモンドは知らぬが中島なら郊外にアトリエをもっていると教えてくれた。

その雑木林の中のアトリエを訪ねると、土曜の午後のみ一般公開という看板が掲げてあった。それでも諦めずに玄関をノックしてみると、息子のケヴィン(Kevin)が出て来てくれた。顔立ちは明らかに日本人だ。はるばる日本からと話したらショー・ルームを開けてくれ、故人となった父ジョージや自らの、タンスだのテーブルだの、日本の松本民芸家具等にも通じる素晴らしい木工の造作を見せてくれた。聞くと、はたちの頃日本の私の通っていたと同じ大学に、留学していたという。この偶然でかなりうちとけて話げできた。日本でも毎年5月に、東京の小田急百貨店で家具の展示会を開いているというので、来月は必ず行くよと言って別れることになった。

アントニン＝レーモンド

レーモンドの住所は、ケヴィンから聞くことができた。石造りの農家で、「この辺りでレーモンド氏の住まいを探している」と尋ねたら、中から出て来た娘さんに「それはうちのことです」と、にやっと笑って返された。彼女は故レーモンドの孫に当たるという。やはりはるばる日本からと話したら、せっかくだから祖父の改造した我が家を見て行きなさいと、中に通された。木をふんだんに使ったインテリア、窓には障子。生涯の大半を日本で送った建築家らしいデザインだった。戦前、フランク・ロイド・ライトに従って来日したレーモンドは、戦時中引き揚げてこの場所に暮らした一時期を除いて、その活躍の舞台

を日本に置いた。



写真6 軽井沢の聖パウロ教会

東京女子大や名古屋の南山大学の全体計画。あるいは映画『ここに泉あり』で有名な高崎市にある群馬交響楽団の音楽センター。軽井沢に山荘を持ったため、今や旧軽のシンボルとも言えるあの木造の「聖パウロ教会」も彼の設計による。紹介された旦那さんはコンピューター技師だったが、芸術家の血は争えないのか娘さんの姉も写真家だという。別棟の祖父のアトリエを使っているから、ぜひ見て行きなさいと誘われた。畑の中に立つアトリエには、製図器こそ置いていなかったが、姉の作品の中にレーモンドの建築作品を写したスチールもあった。そして家族に囲まれた晩年の氏の姿を写したものも……。外に出ると、夕陽が雑木林の向こうに沈むところだった。冷たく透明な空気が、夕陽の紅を鮮やかにしていた。

プリンストンへの帰り道を教えてもらい、帰路につくことになった。デラウェア河を対岸のランバートヴィル (Lambertville)へ渡り、ニュージャージーの州道を経てあの大学町に戻った時には、夜も7時を回っていた。こうして、いかにも日本的な、忙しい行程の旅を終えることになった。 了